
私の物語 ～ S ～

♪ ユキ ♪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の物語 ～S～

【Nコード】

N6685T

【作者名】

♪ユキ♪

【あらすじ】

皆様 はじめまして。

えっなんですか？ 私は誰かって？

ご存じないならお教えいたしましょう。

私の名前は悠里と申します。

お昼寝を満喫中にいつの間にか異世界トリップを経験してしまったなんのとりえもない女なのでございます。

トリップ先ではいきなり美形青年が目の前に！

さあどうしよう。さて、どうしましょう？

そんな私が主人公の物語。
はじまりはじまり。

前編

はい。

皆様こんにちは。

いえ、こんばんは　のお時間でしょうか？

私は今…

どこにいますか？

私…

自分でも信じられないことに衆人環視の中でトアルお方の膝の上に座っております。

このお方…

私の身体に手をまわして私を逃がさないようにガッチリ抱きしめております。

身動きしてもまったく動けなかった状態から考えると、少しだけでも力が緩んだだけましというものでしょう。

さてさて、なぜこのような状況になったのか…

思い起こせば今日の事。

いつものことと思いつつも、睡魔に負けて寝てしまったのが原因でしよう。

・
・

そう。

今日は日曜日。

ノルマに追われ一週間の仕事に疲れ果て、ようやく訪れた休日。

24歳 会社勤め4年目彼氏いない歴年齢の私は家に引きこもってのんびりとした休日を楽しんでいたのです。

そしてお昼頃まで睡眠をむさぼり朝食兼昼食でお腹を満たしました。

その後はいつものようにPCで大好きなネット小説を楽しんだあと…
私はのんびりとお昼寝の体制に入っただけであります。

引きこもりといわれればそうかも知れませんが、仕事で対人関係に疲れた私には人とかかわらない至福の時なのであります。

天気も良く、5月という清々しい本日。

夢の世界に引き込まれるのにそれほど時間が必要ではありませんでした。

そしてゆっくりと睡眠を満喫し寝るだけ寝て自然と目の覚めた私の見た光景は…

すでに自分の部屋ではありませんでした。

そう、私の部屋は四畳半。

物にあふれた部屋の真ん中に万年床となった布団が鎮座している狭い部屋。

その布団でいつものように眠っていたはず。

なのに今私がいるのは…

どこの御貴族様の部屋でしょう？と思わずにはいられない天蓋付き

の豪華なベット…その中央に私は寝ていたのです。

思わず起き上がりその掛布に手を添えてみます。

この肌触りの良いシート…

これはそう、この肌触りだけで高級感がわかるというものです。

周りを見渡してもこんな豪華な私の部屋が5つくらい平気で入ってしまいそんな空間に覚えはありません。

そして何より私が驚いたのは…

私を見つめているベット脇にいる男性の存在でした。

その男性は…

そう。

まさに童話に出てくる王子様。

ブロンドの髪に淡いブルーの瞳でこちらに視線を向けてくるこの男性はこの部屋にしてこの人ありといえるような美しさを兼ね備えておりました。

服装は、中世のヨーロッパ貴族を思い浮かべていただければと思います。

その男性に見つめられる私…

服装は休日だったこともあり何の変哲もない無地のスウェットです。髪もぼさぼさでお肌のお手入れもその…怠った私はなんてこの部屋に似合わないのでしょうか。

女を捨てている…そうかもしれません。

ああ、一応会社に行くときはそれなりに整えていますよ。

でも、今日はお休みでしたし…楽にしているても良いじゃないですか…

と、こんな感じの私です。

男性からこんなにも見つめられる経験などありません。

もう、普段ではありえない状況のダブルパンチで言葉もないほど混乱中なのでアリマス。

あっ！

皆様 言い忘れました。

日本人としての礼儀ですよね。

では、自己紹介を少々失礼します。

私は 九条^{くじょう} 悠里^{ゆうり}と申します。

日本在住 黒目黒髪 中肉中背 の普通の女でございます。
どうぞ良しなに…。

中編

さて、そんな私ではありましたがそこからはあっという間でした。

なんと目の前にいた男性がいきなり私に抱きついてきたのです。

抱きつかれた私は驚きで固まっておりました。

十分な時間この男性に抱きしめられ、その暖かさに安心感さえ抱いておりました。

そしていつのまにか現れた清楚なメイド服をきた侍女さんにあっという間に私は湯殿に連れて行かれ、磨きあげられて…

御姫様のようなドレスを着てまた部屋に連れ戻されたのです。

休む暇もなく男性に手を取られ長く豪華な廊下を進みます。

あまりの長さに私は途中で疲れてしまい足がもつれて転びそうになったのです。

そのときからです…この男性の力強い腕に抱きあげられ、状況を確認するよりも早く御姫様抱っこのまま謁見の間だと思われる会場に入った時には羞恥で顔が赤くなりました。

その時に周りを見ないようにしていたのが問題だったのでしょうか…
安心できるぬくもりを感じていたのでその暖かさに包まれ、恥ずかしさから顔を隠していたので周りの状態がわからなかった私は…
いつの間にか一つ上にある壇上の椅子に近づいていました。

男性がその椅子に座り、その膝の上に私も一緒に座ることになりました。

御姫様抱っこのまま横抱きで静かに座れられ、どういう状況なのか理解した時にはすでに多くの瞳にさらされていたのであります。

この間に私たちは言葉を交わしておりません。
状況についていけず今まで固まっていた私。

そんなやり取りもない私たちでしたが動きがありました。

皆が集まるこの場所で進行役と思われる人からこの男性が席に着いた瞬間ざわめいていた会場をおさめる言葉が放たれました。

「静粛に。陛下よりお言葉がございます」

陛下……………？

私はいま自分の耳に入ってきた言葉を信じることができませんでした。

場所もさることながらこの人に高貴な雰囲気は感じておりました。
しかし、まさか陛下と来るとは思ってもみなかったのです。

…いえ、この会場に入ったときから何となくわかっていたつもりではありました。
ですがこんな非現実的な状況を信じたくなかったというのが本音でしょう。

さてさて、私を抱きしめたままにも関わらずこの男性は力強く宣言したのです。

「急な招集にも関わらず集まってくれたことに感謝する。
今日は報告したき事があり集まってもらった。」

ザワザワザワザワ…

突然の招集・そして報告ということで再び会場はざわめきに包まれておりました。

手を私を後ろから抱き締めるようにしているこの男性。片方の手を挙げ場を一瞬で静まらせました。

そして。

「余、レオンハルト・ロードス・ローウェイズはこの娘を妃とする。以上だ。解散」

あつこの人の名前レオンハルトっていうんだあゝ

と、私は一番気になるところを聞かなかつたふりをしてとりあえず不自然に現実逃避していたのです。

しかしアレですね。

ここまでくればさすがの私もわかります。

認めたくはありませんが、これは私の大好きな噂の異世界トリップというものですな。

前編 s i d e : L

私は、これほどまで心ひかれた人に出会ったことがなかった。

一目見たときから目を反らせない。

こんなことは初めてで…

この感情がなんと言うのか教えてほしい。

でも、この感情を知るのが怖い。

久しぶりに公務の間に空いた時間。

普段ならこんな時間に自分の寝室に足を運ぶことはない。

だが、なぜか足は寝室に向かっていた。

なぜだかわからなくて、でも何かを待ち焦がれているような高揚感。

寝室についたはずなのに、いつもの部屋のはずなのに、いつもと同じ部屋とは思えなかった。

そして一瞬の強い光に包まれることになった。

その次の瞬間には…

私の目の前に天使が舞い降りてきていた。

私のベットの中央にとても気持ちよさそうに眠っている。

その寝顔はとても愛らしく見ているだけで心が安らいでいく。

・
・

どのくらいそうしていたのだろうか？

いつまで見ていても飽きなかったのだから仕方がない。

そしてその時は訪れた。

天使の瞳が開いたのだ。

その黒い瞳に引き込まれる。

すべてを私のものにしたいくなる。

手放したくない。

そう思った。

警戒させてはいけないと私が格闘している中でこの天使は身を起こし周りを見渡している。

目をまんまるくして頬をうつすらとピンク色に染めているその姿に庇護欲をそそられずにはいられない。

その後はもう本能のままだったと思う。

思わずその身体を私の腕の中に閉じ込めて思う存分その暖かさを堪能したのだから。

そうしているうちに侍女が様子を見にやってきた。

だが私はそれどころではない。

そう。

もう誰が何と言おうと私がこれからともに歩むのはこの娘しかいな

いと思ったのだから。

思い立つたら即行動しなければ…。

幸い私には妃がない。

今まで臣下にいくら勧められてもどうしても妃をむかえる気になれなかったのだ。

側室も…私は自分で見つけたただ唯一の女性を愛しぬきたいと漠然と生きていたのだからいない。

それがこういうことだったのだと今わかった気がする。

これは、神の思し召しだろう。

私はこの娘が私のもとに来るのを待っていたのだ。

寝起きと思われるこの娘。

はやく自分のものだとしめたくも思いつつ、女性は人前に出るときにそれなりに磨きこむときいていた。

だからまずは湯殿を用意するよう侍女に申し伝える。

その間もこの腕の中の娘は何も反応を示さない。

ただおとなしく私に寄り添っているところを見ると不快ではないようだ。

準備が出来たと言いに来た侍女にこの娘を預け、私は側近の者に謁見の間に主要な臣下を集めるように指示をだし、自身の身も整えた。綺麗に身を整え、いいところを見せたいと思ったのも初めてかもしれない。

そうしているうちに皆がそろったと報告をつけ、娘が戻ってくるのを待っていた。

そんな時、そういえば名前すら聞いていないことに気がついた。だが、この娘を逃がしたくはない。

ともかく自分のものにしなくてはと思ったのだ。

娘が私のもとに戻ってきた。

我が国の衣裳に身を包みなんと華やかなことだろうか。

見続けていた目が駄目だ。

このままでは私の腕の中から逃げて行ってしまいそうで怖くなる。そう思いさっそく手を取り歩きだしてしまった。

こんな私の行為は性急すぎだろうか。

だが許してもらいたい。

それほど恋焦がれているのだから。

だが、その思いが歩幅にも表れていたのだろう。

娘が足をもつれさせてしまった。

これは危ないと思い掬いあげる。

そして、そのまま抱き上げて進んでいくことにした。

私にふれる娘の体温は私の鼓動を高鳴らせる。

娘も恥ずかしげにうつむきながらも暴れはしない。

これは私に身をゆだねてくれたと思って良いのではないだろうか。

嬉しかった。

頬が緩むのが止められない。

つき従ってきた長年の側近でも私のこの表情に驚いている。しかし、止められないのだから仕方がないではないか。

そうこうしているうちに謁見の間の扉が見えてきた。

扉の両脇に立つた騎士が扉を開く。

私はなんのためらいもなくその中に足を踏み入れた。

もちろん手の中にある宝を抱きしめながら…。

中編 s i d e : L

謁見の間。

重臣たちが急ぎにも関わらず集まったこの部屋に足を踏み入れた時から一段とおとなしく私にすり寄ってくる存在がある。

そう、それは私の腕の中にある。

おとなしくしてくれてくれるのをいいことに、私は玉座に迷いなく腰を下ろした。

もちろん手放すはずのない腕のぬくもりと一緒に。

落ち着いたところによやく顔をあげたぬくもり。

周りをみて目をこれ以上ないほどに開いている。

そんな姿も愛らしい…。

進行役の者が場を収め皆が私の言葉をまっていた。

腕の中の存在がどうして良いかわからないといった様子で不安げに瞳を揺らしていた。

小動物のようで頼りなげに震えている臉を見てしまったら止められなかった。

私は思わず腕の力を強めてしまったのだ。

さすがに私が力を入れすぎて苦しかったのか離れようと身じろいでいることを察し、腕の力を緩めたが…

よかった。

私の腕の中に留まってくれるようだ。

では、事を進めてしまおう。

そう思って私は目的を果たすことにした。

「急な招集にも関わらず集まってくれたことに感謝する。

今日は報告したき事があり集まってもらった。」

それだけでこの場に集まった者は緊張に包まれる。

この状況から腕の中の存在に不躰な視線をよこす者もいた。

好奇心な視線も多かった。

そんな視線が集中し、私の天使に対してなんということだと思わずにはいられない。

私はこの娘の居心地が悪くならないように視線で牽制した。

周りは一瞬にして静まりかえる。

空気が凍ったのが分る。

他のことを考えているらしい娘は自分の世界に入ってあまり状況をわかっていない様であつたのが救いだらう。

そして、私は言葉を続ける。

「余、レオンハルト・ロードス・ローウェイズはこの娘を妃とする。
以上だ。解散」

そう。

一番言いたかった言葉を言いきった。

もうこの場に用はない。

許可など必要ないのだから。

私が全てなのだ。

暴君。

それでもいい。

普段の政では民の声も臣下の意見にも耳を傾け善政を心がけてきたつもりだ。

だが、どうしてもこれだけは誰に何を言われても変えるつもりはないのだからよいだろう。

今の私の国を見ると近隣諸国からは世界の中心・大国とまで呼ばれている。

無理に政略結婚する必要もなく国は充分潤っているのだから文句は言わせない。

そして私は茫然としている娘を来た時と同じように腕にしまいこの場を後にして直ぐに私室へと戻ることにした。

今まで色あせて見えた世界がウソのように華やいている。
疲れも吹き飛んだように身体が軽い。

さあ　これからが楽しみだ。

・
・

後編

はい。

皆様 悠里です。

あの後色々なことがありました。

そうですね、今までの事を整頓してみましようか。

まずは、あの後いつの間にかまた最初の部屋と思われるところに戻ってきておりました。

そこで…

そこでようやくお互いに自己紹介です。

私の名前は言い難いらしく ユーリ と片言に伸ばして呼ばれるようになってました。

私も長い横文字の王様のお名前を覚えるのは大変で、ご遠慮したいと思っていたらなんとレオンと愛称で呼ぶことを許していただけました。

このお名前で呼ぶことが許されているのは私を含めてほんのわずかな人数しかいないんだそうです。

あとは、この場所が本当に異世界だと確信する内容を聞くことが出来ました。

何もかもが初めてのことで…

耳慣れない内容もありました。

でもなぜか私はもう取り乱すこともなく受け入れることができたの

です。

それは今も私を背中から抱きしめるように包んでいるレオンという存在に私が惹かれていたからではないでしょうか。

と、いうことで…私はあまり取り乱すことなくこの状況を受け入れつつあったのです。

ふう、落ち着いて振り返ってみると以外にあっさりしてました。

そうそう。レオンの言っていた 妃 発言は有効だったようです。

「勝手に事を進めてしまった申し訳ない。 だが、ユーリ君を離したくなかった…」

そう真剣に告白された私は、承諾する旨を伝えてしまいました。
この先何があるうとも大丈夫。

そう思えるように諭されたからかもしれません。

・
・

教会の祝福の鐘が國中響き渡る。

王都で一番大きな教会。

その祭壇の前に私は立っています。

隣にいるのはもちろん心の通じ合った旦那様。

思い起こすところまでの道のりが頭に思い浮かびます。

あつという間に時間は立つものですね。

この世界にきた時を昨日の事のように鮮明に思い出します。

いえ。

本当に昨日なのですけどね…。

心が通じ合ったと思ったのが昨夜。

そして今、私は教会でレオンを夫とすることを誓約したところです。

夜を徹して行われた準備。

ドレスなどは決まりがあり代々の王妃に受け継がれたものを使用するようです。

代々受け継がれているものでしたのでサイズ直しくらいであまり時を必要とせず準備が整い、厳かな式典は粛々と進みました。

指輪の交換。

そして 誓いの口付では…

急な式典ということもあり身内・重臣のみが集まった会場の真ん中で、周りがあきれるくらいの熱愛ぶりを晒してしまいました。

あきれる視線は感じて、思いのほか侮蔑や敵意など反対意見がなかったことに驚きです。

そんなことに現実逃避しているとようやくゆっくりと私達の唇は離れていきました。

思いのほか深い口付に腰を抜かし、倒れそうになってしまった私の腰をしっかりと抱きしめる旦那様。

その嬉しそうな顔は忘れることはないと思います。

・
・

あれよあれよと時間は経つものです。

時間はすでに夕刻。

ここに来るまでに色々準備をしていたいただきました。
入念に入浴をして、香油でマッサージ。
お肌がピカピカです。

夫婦の寝室に通され心落ち着くようにと焚かれた香のなか私はゆっくりと寛いでその時を待ちます。

あっ 人が近づく気配がします。
この部屋に入ってこれるのはあと一人しかおりません。
期待と不安に胸が弾みます。

これからどんなことが起こるのか……
それは皆様のご想像にお任せします。
ですがこれだけは言わせてください。

翌朝、私は髪をなでる優しい気配を感じました。
目を開けてほほ笑む優しい笑顔を見ることができました。

明るい日差しに照らされ恥ずかしかった私。
そんな私を包む温もりと一緒に穏やかな時を過ごすことが出来たのです。

忙しいはずなのに側にいてくれる存在があることを嬉しく思いました。

私は、こんなに素敵な旦那様に出会えて幸せです。

いきなり投げ出されたと思った世界ですが、今までで一番幸せだと確信しています。

親不孝。

そうかもしれません。

それでも、この幸せを手放したくないと思うのです。

この幸せが偽りだなんてとても信じられません。

偽りの世界だと思わずに受け止められるのは現実に引きとめてくれる存在がいるから。

離れようとしても離れていかないよう捕まえていてくれる存在があるから。

そう。

だから、これは私に起きた現実なんだと思います。

起こるべくして起きたことなのだと思うずにいられません。

そして、これから紡いでいく…

紡がれていくウソのような 本当の 私の物語。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6685t/>

私の物語 ～ S ～

2011年6月16日07時23分発行